

7/18 SAT. 25 SAT. 26 SUN.



©K.Miura

Jonathan Nott

Conductor

ジョナサン・ノット

[指揮／映像出演]

Music Director

音楽監督

イギリス生まれ。フランクフルトとヴィースバーデンの歌劇場で指揮者としてのキャリアをスタートし、ルツェルン交響楽団首席指揮者兼ルツェルン劇場音楽監督、アンサンブル・アンテルコンタンポラン音楽監督、バンベルク交響楽団首席指揮者を経て、2014年度より東京交響楽団第3代音楽監督。2017年からはスイス・ロマンド管弦楽団の音楽監督も務めている。その抜群のプログラミング・センスに加え、古典から現代曲まで幅広いレパートリーを誇り、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、コンサートヘボウ管、シカゴ響等のオーケストラ、ザルツブルク音楽祭、ルツェルン音楽祭、BBCプロムス等の音楽祭へ客演している。ウィーン・フィルやベルリンフィルとの録音のほか、東京交響楽団とはオクタヴィアレコードより6つのCDをリリースしている。2020年3月第32回ミュージック・ペンクラブ音楽賞「オペラ・オーケストラ部門」を東京交響楽団とともに受賞した。

Well known for the power, vigour and clarity of his interpretations of Mahler's works, Jonathan Nott has been music director of the Tokyo Symphony Orchestra since 2014. He was also appointed as Music and Artistic Director of the Orchestre de la Suisse Romande as from 2017 and had been principal conductor of the Bamberg Symphony Orchestra for 16 years. Mr. Nott began his career at the opera houses in Frankfurt and Wiesbaden where he conducted all major works of the repertoire including Wagner's complete Ring cycle. Mr. Nott has a large catalogue of highly acclaimed recordings by the Orchestre de la Suisse Romande, the Bamberg Symphony Orchestra, the Berlin Philharmonic, and the Vienna Philharmonic Orchestra as well as recordings with the Tokyo Symphony Orchestra. In 2020, Mr. Nott and Tokyo Symphony Orchestra won the Best Orchestra of the 32th Music Pen Club Music Award.

7/25 SAT. 26 SUN.

イゴール・ストラヴィンスキー (1882 ~ 1971)

八調の交響曲

記念すべきストラヴィンスキーの作品番号1は、リムスキー=コルサコフに師事していた時代に書かれた交響曲 変ホ長調 (1905~07) であった。その後、管楽器のための交響曲 (1920/40) と訳される作品も書いているが、これは英語でいえば本来「シンフォニー」で複数形になっているため、正しくは交響曲と呼べない。再び作曲されるようになるのは、新古典主義期の範疇となる《詩篇交響曲》(1930)以降のことで、本作《八調の交響曲》(1938~40)と《3楽章の交響曲》(1942~45)が遺された。《詩篇》《八調》《3楽章》は、それぞれ別の時期に書かれた作品なのだが、《詩篇》の最終楽章に登場する旋律が《八調》の主題となり、《八調》の最終楽章に表れる上行音形が《3楽章》の冒頭となり……と、意識的に連続性が形作られている。

ソナタ形式による**第1楽章**は、前述した通り《詩篇》で「Laudate」という歌詞にふられた音形(短2度上行、完全4度下行)が第1主題となり、ベートーヴェンの交響曲第5番のように主題労作が繰り返されていく。しばらく後に登場する低弦が中心となって繰り返される音形が第2主題(……なのだが、厳密に言えばこれも第1主題の変奏によって作られている)。こちらも主題労作が行われる。1小節の総休止のあと、トゥッティ(総奏)となることから展開部となり、徐々に盛り上がっていくとクライマックスでグレゴリオ聖歌の〈怒りの日〉が引用される。緩徐楽章となる**第2楽章**は三部形式で構成され、中間部で倍速テンポに転じる。面白いのは主部に戻る際もテンポが早まったままということだ。スケルツォの**第3楽章**は、冒頭の総奏から導き出された完全4度で上下する旋律が第1主題、ファゴットが主旋律を吹いてトロンボーンが伴奏する第2主題で構成されるソナタ形式である。展開部が短い代わりに、再現部で様々な変化が加えられる。管楽器による重苦しい序奏ではじまる**第4楽章**もソナタ形式で構成されており、テンポが上がって弦が加わる箇所から第1主題なのだが、まもなく第1楽章の主題群も合流して、主題労作が繰り返される。冒頭の序奏の雰囲気は回帰するあたりから展開部となり、対位法的な書法で緊張感が高められていく。まもなく第1主題が高らかに再現されるのだが、第1楽章冒頭の再現によって阻害されてしまい、そのまま穏やかに曲を締めくくる。

小室敬幸 TEXT by Takayuki Komuro

作曲: 1938 ~ 40年4月

初演: 1940年11月7日、シカゴ。作曲者自身の指揮、シカゴ交響楽団。

編成: フルート3、(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、バス・チューバ、ティンパニ、弦5部

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55『英雄』

作曲者の創作史のみならず、ジャンルの歴史にとっても革命的な交響曲。作曲完了は1804年初頭。ロプコヴィッツ侯爵の屋敷等で非公開演奏が重ねられた後、1805年4月7日、アン・デア・ウィーン劇場で公開初演が行われた。長大さや複雑さが聴き手を困惑させたことが、初演の批評から伺われる。

現実の革命家ナポレオンと作品を関連づけようとしたこともあったが、1806年の初版楽譜では「英雄交響曲、一人の偉大な人間の思い出を祝して」なる表題に落ち着いた。ナポレオンの明示は、自らの政治的立場を表明することに等しく、貴族の支援に依存するベートーヴェンには不可能な行為だったに違いない。

第1楽章は巨大なソナタ楽章。主和音2発の後、まずチェロで主旋律が奏される、交響曲としては異例の冒頭主題は要所で登場。3拍子の自然な拍節感を乱す不規則なリズムの利用、展開部のクライマックスに炸裂する不協和音等、大胆な工夫にも事欠かない。

当時は戦争描写の交響曲で葬送行進曲の部分が出てくることがあったが、ハ短調の**第2楽章**も「葬送行進曲」と題されている。悲壮感に満ちた主部とは対照的に、ハ長調の中間部は天国的晴れやかさを基調とする。フーガ風な展開を見せる主部再現の後、コーダが主要主題を解体していく。

第3楽章は、オーボエのソロが旋律的な素材を奏するまで、弦楽器の不規則なリズムが密やかに刻まれるというスケルツォらしからぬ開始をもつ。トリオはホルン三重奏が明朗な世界を拓く。

第4楽章はト短調の導入に続いて、切れ目なく展開する変奏曲楽章。主題旋律はバレエ《プロメテウスの創造物》などでも使われていた。バス声部(a)のみの提示とその変奏を実施した後に、主旋律(b)を伴った完全な形での主題提示という手順を経た上で、ト短調の‘ハンガリー風行進曲’風、フーガ風、アダージョ変奏など、个性的な変奏が繰り広げられ、導入と断片的な(b)を利用するコーダで閉じられる。

安田和信 TEXT by Kazunobu Yasuda

作曲：1804年

初演：1805年4月7日、アン・デア・ウィーン劇場

編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦5部